

---

# ひとりじゃ飛べない～輪るピングドラム

三畳紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとりじゃ飛べない輪るピングドラム

### 【Nコード】

N9864Z

### 【作者名】

三畳紀

### 【あらすじ】

ピンドラの二次創作。他の作品とのクロスオーバーも原作に登場しないオリジナルキャラクターも出ませんが、設定や展開を微妙に脚色しています。

1st lap

僕らは何者にもなれない(前書き)

この物語はおおむね『輪るピングドラム』本編に準拠した展開、人物造詣になっております。しかし本編をそのまま綴っては敢えて二次創作をする意味はないので、幾分脚色を加えております。

私による作品改変に賛同されるのも、異を唱えるのも、何もせずスルーされるのも読者の方のお気に召すままになさってください。

## 1st lap 僕らは何者にもなれない

休日のサンシャニー水族館は大勢の客で賑わっていた。沿岸部に面した僻地に立地することが多い同業者の中で、交通の便がいい繁華街にあるこの水族館は少々異質な存在である。

加えてビルの屋上に多数の水生生物を収容する水族館があることは、周囲に林立する高層ビル群の中でも異彩を放っていた。

そのように見方によっては異様な空間でありながら、サンシャニー水族館を訪れている客たちは水槽の中を泳ぎ回る大きさも色も様々な魚たちに魅了されて楽しい一時を過ごしていた。

館内で飼育されている生物は魚類だけではなくペンギンもいた。軽やかに水の中を泳ぐ半面、陸に上がると鈍重な動きしかできないギャップに愛嬌を感じて多くの観客がペンギンのケージの周りに集まっている。

就学前後の幼児がいる親子連れが大半を占めている来場者の中に、3人の少年少女の姿があった。少年2人はおそらく10代後半の高校生で、その隣にいる少女は彼らよりも少し幼く中学生くらいに見える。

「泳いでいる時のペンギンはまるで空を飛んでいるみたいだねえ」

亜麻色の長い髪をした少女がフェンスから身を乗り出すようにして、プールの中を優雅に泳ぐペンギンの姿に感嘆する。

「陸に上がるとちよっと間抜けだけどね」

「まるで晶馬あきまみたいだな」

少女のペンギンに対する素直な賞賛に女性的な優しい風貌をした少年が皮肉っぽい言葉を接ぐと、彼とは対照的に機敏そうで凛々しい顔立ちをした少年がよたよたと鈍い足取りで歩くペンギンの姿に相方の少年をなぞらせる。

「なんだと冠葉かんば!？」

「はは、冗談だよ」

凛々しい顔立ちの少年冠葉にからかわれたのを腹に据えかねて、晶馬は優しげな顔の眉間に皺を寄せて冠葉の不適當な表現に抗議する。冠葉はあまり威圧感のない剣幕で迫ってくる晶馬の抗議を作り笑いで適当にはぐらかそうとするが、ちょうど頃合いを見計らったように冠葉の携帯電話が着信音を奏で出す。

「悪い、ちよつと外す」

「また女の子、そういうの少しは自重しなよ？」

「部活のマナージャーからだよ、戻ってくるまで陽毬ひまりのこと頼むぞ」

晶馬は女遊びにうつつを抜かす兄の行いに眉を顰めるが、冠葉は電話をかけてきたのが所属している陸上部のマナージャーだと述べて晶馬からかけられている嫌疑を晴らそうとする。

「結局女の子、しかも冠葉に好意を持つてる娘こからの電話じゃないか：これだから女にだらしない冠葉菌は嫌なんだ」

妹のお守りを押し付けて電話をしに行く冠葉の背中を見送りながら、晶馬は兄の性格に対する不平を漏らす。

「まあまあ、女の子にモテている分、冠ちゃんだって大変なことがあるんだろっし」

「初めから本気で付き合うつもりがないんならはっきりとそう言えばいいのに、兄貴が中途半端に優しくするから相手の娘だって期待しちゃうんだ。兄弟だからって泣かされた女の子に逆恨みされる僕はいい迷惑さ」

「本当に冠ちゃんと晶ちゃんは対照的だよ、ぱっと思いつく共通点はかけっこが速いことくらいしかないよ」

容姿だけでなく性格的にも対照的な2人の兄に共通していることを挙げるのならば、共に足が速いことくらいしかすぐには思いつかないと陽毬は苦笑する。

「兄貴はともかく、僕はそんなに足が速くないよ」

「晶ちゃんは謙虚だな、中学の時に陸上の試合で獲った賞状が家にたくさん飾ってあるじゃない？」

「冠葉に比べればずっと少ないし、それにどれも地区大会のものばかりじゃないか。都大会に行ったら決勝にも残れなかったよ」

「それでも少しは足の速さに自信を持っていいと思うよ。例えば地区大会だつてみんなが賞状を貰える訳じゃないんだから」

「そつだね、陽毬は本当に優しいな」

晶馬は相対的に考えてみれば決して自分の足は速くないと謙遜するものの、陽毬に念を押されると少しは自嘲的な考えを改めたらしく、自分に自信を持つよう鼓舞してくれた妹に微笑みかける。

「ありがとう。ねえ晶ちゃん、お土産見てきていい？」

「ああ、気に入ったのがあれば今日は奮発して買ってあげるよ」

笑い返しながら礼を言ってきた妹の笑顔にほだされて、晶馬は思わず景気のいいことを口走ってしまう。

「本当！？ それじゃ何をおねだりしようかな」

晶馬は3人分の入園料も安くはなかった自分の寂しい懷事情に気付いて、軽はずみな口を利いてしまったことを後悔する。しかし陽毬は嬉しそうな顔を浮かべると小走りで土産売り場の方に行ってしまった。

最愛の妹の期待を裏切る訳にもいかず、晶馬は改めて財布の中身を確認すると陽毬がねだるものが高いものでないことを祈りながらとぼとぼと土産売り場に向かい始める。

「…兄貴の言う通り、どこか冴えない所は似ているかもな」

土産売り場までの途中、ふいに晶馬はペンギンのケージを振り返る。やはり陸に上がったペンギンの動作は緩慢で不恰好であり、その決まりの悪さが景気のいいことを言って財布の中身を気にかけている自分の決まりの悪さに共通していると自嘲した。

\* \* \*

兄妹揃って水族館を見物に行った翌日の朝、居間に置かれた卓袱台の上には3人分の朝食が並べられており、兄妹がその周りを囲んでいる。

「いただきまーす」

声を合わせて食事の挨拶をすると、高倉たかくら3兄妹は朝食を摂りはじめた。

「おいしい」

「そうだろ陽毬、俺が晶馬に助言をしたお陰だな」

ふんわりと焼きあがった卵焼きを一口齧った陽毬が味の感想を述べると、「冠葉は自慢げな顔になる。

「偉そうに、テレビで見た隠し味にラー油を使っつてことを言っただけじゃないか」

「俺がその番組を見ていなければ、陽毬がここまで満足する卵焼きは作れなかった」

「はいはい、兄貴のアドバイスに感謝してますよ」

「しかし本当に上手いな、この卵焼き」

投げやりな調子で晶馬は返事をする。茶碗によそった白米をかき



こんでいく。冠葉はつれない様子の晶馬を尻目に彼が作った卵焼きに次々と箸をつけていく。

忙しく食事を貪っている兄たちとは対照的に、陽毬は一口一口を噛み締めるように時間をかけながら少しずつ食事をしていた。よく咀嚼した白米を胃に流そうとして、陽毬は椀に注がれた味噌汁を啜る。

「晶ちゃんのお味噌汁の味はお母さんと同じだね」

「そう?」

「うん、晶ちゃんはきつといいお婿さんになれるよ」

陽毬が母親と同じ味の味噌汁を作れる晶馬の料理の腕を褒めると、晶馬は冠葉の無神経な一言を聞いて以降への字に結んでいた口を嬉しそくに綻ばせた。

「そつだ晶馬、今日は晩飯要らないから」

「帰りはまた遅いの?」

「仕事がどうなるかはその時にならなきゃ分からないから、何とも言えないな」

「もっと時間がはつきりしているバイトを探してよ。せつかく兄貴の分の晩飯を作っても無駄になるのは嫌だし、帰りが遅いと陽毬が心配するんだよ」

「代わりになるものがあればそうするさ。でも今のところアレよりも割のいいバイトは見つからないんだよ」

「…ホストなんて真つ当な高校生がするバイトじゃないよ」

誰かの婿になるまでもなく、既に家事の切り盛りをしている晶馬に冠葉は今晚はバイトで帰りが遅くなることを伝える。晶馬は高校生であるのに兄が水商売のホストで働いていることに難色を示すものの、冠葉は短時間で高収入が望める今のバイトを辞めるつもりは毛頭ないようだった。

「心外だな、俺は遊ぶ金欲しさでホストをしている訳じゃないぜ。家計を支えるために働いているんだ」

「それは分かっているけれど、だからって……」

兄が夜の世界に身を置いていることに晶馬は忸怩としない思いを抱いてはいるものの、その動機が決して不純なものでないことは重々承知しているのであまり強い態度で冠葉を責めることは出来なかった。

現在高倉家には両親が住んでおらず、冠葉と晶馬それに陽毬の子ども3人だけで生活をしていた。そして家を空けている両親に代わって、家族3人が暮らしていくための収入の多くを冠葉が年齢と偽って働いているホストクラブでのバイト代に依存していることは晶馬たちにとって疑いようのない事実であった。

\* \* \*

晶馬と冠葉は通学と同じ駅を利用しており、家を出てからもずっと一緒にいる。更に2人は同じ都立高校に通っているので、電車の中だけでなく学校に着いてからも同じ場所で時間を過ごしているの

だった。

結果として四六時中顔を突き合わせていることになり、電車の中で隣り合って並んでいても兄弟の間に会話はほとんどない。加えて今日はいつもよりも車内が混雑しており、身動きのままならない満員列車の居心地の悪さに晶馬も冠葉もかなりいらついているようである。話す気も起きないようだった。

「うわっ……」

晶馬たちが利用している懸垂式の地下鉄、東京スカイメトロの荻窪線を走る列車は駅に近づいて減速するたびに車体を大きく揺るがせる。その振動につられて動く人混みに揉まれて、晶馬は何度も体を左右に揺さぶられていた。

今も振動に揺られた拍子に危うく近くにいた女子高生にぶつかりそうになってしまう。ショートボブに髪を切り揃えたなかなか可愛い顔をした娘で、晶馬たちの在籍している高校の近くにある女子高の生徒であることが緑の襟をしたセーラー服で覗えた。

だが不用意に女子高生などに接触してしまうと、場合によっては痴漢扱いされてしまう可能性もある。同じ駅で降車し、隣接する学校の生徒にあらぬ疑いをかけられては自分の社会的信用が地の底まで失墜してしまう危険性を晶馬は感じる。平穩な日常を送るために余計なトラブルを起こさないため、晶馬は是が非でもその女子高生に触れることを回避しようと努める。

すし詰め状態の車内では体の自由が利かず晶馬は吊革を握ることも出来なかったが、ただでバランスを保つとすれすれのところで女子高生との接触を免れる。

危機的状況を回避したと晶馬が安堵の息をついた瞬間、列車を指定された停車位置の直前で停車させそうになった運転士がわずかに車両を前進させる。その弾みで晶馬の体がよろけ、姿勢を保とうと反射的に手を横に伸ばしてしまふ。不運にも晶馬の伸ばした手は先刻接触を回避したショートボブの女子高生の柔らかな尻に触れてしまった。

「あつ……」

己の失態に思わず晶馬が声をあげてしまったことで相手の女子高生の視線が彼の方に向く。晶馬とショートボブの女子高生の視線は一瞬交錯し、その後晶馬の顔色は急激に青褪めていく。対照的に女子高生の顔は自分の尻を撫でられた怒りと羞恥で紅潮した。

「きゃーっ、この人痴漢です！」

女子高生は自分の尻に触れた晶馬の腕を掴むと、大声で彼が自分に痴漢行為を働いたと周囲に喧伝し始める。女子高生の声を聞きつけて彼女と彼女に腕を捻り上げられている晶馬に乗客の視線が集中した。

「ち、違う、僕は痴漢なんかじゃ……」

「嘘よ、さっきあたしのお尻触ったじゃない！」

「あ、あれはいきなり電車が動いたせいで不可抗力だ。僕はそんなことをするつもりは……」

「みんなそうやって言い逃れしようとするけど、あれは絶対ワザと

よ。直接被害に遭ったあたしが言うんだから間違いないわ」

晶馬は必死に自分に痴漢を働く意志はなかったと訴えるが、周りの乗客は女子高生の肩を持つばかりで一人も彼の言葉を信じてはいないようだった。冤罪を着せられて自分は全てを失うのだと、晶馬は悲壮な面持ちになる。

「いいや、そいつは痴漢なんかじゃない」

野次馬の中から痴漢として警察に突き出されるのだと諦めて俯いていた晶馬を擁護する発言が出てくる。助け舟を出してくれた人物の声のした方に晶馬は顔を上げて視線を向けた。

「冠葉！」

「何よあんた、こいつの知り合い？」

「知り合いだったら無視してもいいんだが、生憎と俺はあんたが捕まえているその不甲斐ない顔をした奴の兄貴でね。身内のことを見捨てる訳にはいかないのさ」

ショートボブの少女に鋭い眼差しで睨みつけられても、冠葉はその剣幕を意に介さずに飄々とした様子で肩を竦める。

「身内だからって痴漢を犯した奴を庇うの？ そんなの身勝手な理屈だわ」

「いくら身内でも痴漢をするような情けない奴を庇うつもりはないわ」

「だったらどうして……」

「身内だからこそそいつに痴漢をするような甲斐性がないことをよく知っているのさ。痴漢をする度胸があるのなら、高2にもなって未だに女の子と付き合つどころか告白したことだってないはずがないさ」

身内を庇おうとする冠葉にショートボブの女子高生は食って掛かるが、冠葉は晶馬の奥手ぶりをあげつらうような発言を交えて不肖の弟の弁護を続ける。

「ねえ苹果、言われてみればそんな臆病そうな人が痴漢なんて大それたことをするように思えないんだけど……」

「それに嘘をついている人がこんな顔を真つ青にできたら、この人演技の天才だよ？」

苹果という名前のショートボブの女子高生の友人と思しき同じ制服を着た女子高生たちが、冠葉の話聞いて晶馬が彼女の尻に触れたのは本当に不慮の事故ではないかと宥めはじめる。

苹果は腕を掴み上げている晶馬の、顔面蒼白になっている人が良さそうでちよつと気の弱そうな顔を値踏みするようにまじまじと睨み付けた。

「…本当に痴漢をする気はなかったのね？」

「…もちろんです、神様に誓っても構いません」

晶馬は精一杯誠意を顔に浮かべて、苹果の目を真つ直ぐに見返し

た。一瞬垣間見ただけだった苹果の顔を凝視してみると、やはり彼女の顔の造作は整っていると晶馬はこんな切迫した状況で場違いだと感じながらもそう思った。

「…分かったわ、今日はあなたが痴漢をしていないと信じてあげる」  
「ありがとうございます」

苹果は冠葉や友人たちの説得を受けて、今回は晶馬に害意はなかったと容赦して彼を見逃すことを告げる。濡れ衣を晴らすことができた晶馬が深々と苹果に頭を下げると、冠葉もそれに倣って頭を下げた。

「でも次に疑わしい真似をしたら、その時は問答無用で警察に突き出すからね！」

苹果は晶馬に二度目はないと釘を差すと、友人たちと共に人混みを掻き分けて彼から離れた場所まで移動していった。痴漢の疑いを晴らせたものの、その後学校の最寄駅までの道中、晶馬は周囲から白い目を向けられて居た堪れなさを感じていた。

「堂々としてろ、萎縮していると逆にやってもいない罪を認めたとになる」

冠葉に縮こまっていると逆に疑惑を強めてしまおうと言われて、晶馬は列車から降りたいという衝動を堪えて同じ車両の中に留まっていた。しかしその我慢も最寄駅に辿り着いた時には限界を迎えてしまい、晶馬は脱兎の如く降車して改札を抜けると足早に学校へと歩いていく。

「待てよ晶馬」

「兄貴がいなかったらあのまま僕は痴漢扱いされたままだった。だから助けてくれたことにはすごく感謝している」

晶馬を追って冠葉が隣に走り寄ってくると、晶馬は窮地を救ってくれた兄に謝辞を述べる。

「でも僕は兄貴と違ってどうしてもあの嫌な雰囲気には耐えられなかった。ただでさえ人目に付きたくないのに、まして犯罪者として周りに見られるのなんて我慢できない」

「晶馬……」

豪胆な兄とは違って、神経質で臆病な自分には世間から後ろ指をさされてもなお、毅然とした態度をとり続けることはできないと泣き言を漏らす晶馬に、冠葉はかける言葉に詰まってしまう。

「……きつと何者にもなれない僕には息を潜めてひっそりと過ごすことしかできないのに。幸せになれないのならせめてこれ以上不幸にはなりたくないのに、どうしてこんなことばかり起きるんだ」

「幸せになれないなんて誰が決めた、そうやって何事にも後ろ向きだから今日みたいな不運を自分で引き寄せているんじゃないのか？」

「あんなことをした親のいる僕らが幸せになろうなんておこがましいだろ!？」

自分の将来に悲観的な晶馬の態度が気に食わずに冠葉が彼を突き放した発言をすると、晶馬は親の話を持ち出して自分たちに幸せを



望む権利はないと言い返す。

「おい、自分の親を悪くいうな！」

晶馬の一言が癪に障った冠葉は弟の胸倉に掴みかかって凄んでみせる。晶馬は冠葉から顔を背けつつ、自分の親を悪し様に言ったことを訂正する意志はないようだった。

「どうした高倉兄弟、朝っぱらから喧嘩か？」

「山下……」

険悪な空気を周辺に撒き散らしている高倉兄弟に、彼らと同じ学校の制服を着た男子生徒が気さくに声をかけてきた。刺々しい雰囲気を用意に介さずに迂近寄ってきたクラスメイトに晶馬が反応を示すと、冠葉は彼の襟首から手を離して背を向けた。

「兄弟喧嘩は犬も食わないってか、いや食わないのは夫婦喧嘩だけ？」

「冠葉は選ばれるからそんな強気でいられるんだ。でも僕はあいつと違って選ばれない、選んでもらえないんだからどうしようもないじゃないか……」

相変わらず空気を読めずに空回り続ける山下を黙殺して、晶馬は足早に遠ざかっていく兄の背中を呆然と見つめながら、物理的な距離以上に最も近い場所にいる冠葉が自分と隔てられた場所にいるようなことを呟いた。

1st lap 僕らは何者にもなれない了



2nd Lap

想いはうまく伝わらない

(前書き)

ネオンが爛々と煌き一晩の快楽を求める者たちが連日大挙して押し寄せる夜の繁華街。この街に軒を連ねている店は男性客相手のものばかりではなく、女性客を対象にした店も多数存在している。

このホストクラブ『愛の狩猟区』もそんな女性に一時の夢を与える店の1つであった。

「冠葉<sup>かんは</sup>くん、今夜はわたしの相手をしてくれないの？」

「アサミさんに呼ばれているんだけど、ちょっと外していいかな？」

モデルとして活躍している見目麗しい女性の指名を受けた若いホストが、接客しているテーブルの客に席を移ってよいかを流し目を送りながら訊ねる。

「イヤ、今晚はアタシと一緒にいて」

席を経とうとするまだ少年の面影が残るホスト冠葉を引き留めようと、接待されていた女性客が彼の腕に縋りつく。

「冠葉くん、そのヒトよりもわたしの方がたくさん楽しませてあげるわよ？」

「ふん、舌足らずでお金を落とすことしかできない女のくせに」

アサミという名前のモデルが冠葉を自分のテーブルに招こうと摺り寄ってくる、先に彼を指名していた客がお気に入りのホストを横

取りしようとする彼女に憤慨した。

「お金を持ってないくせに冠葉さんと遊ぼうなんて身の程を知りなさいよ！」

「貢ぐことしかできない女が偉そうなことを言わないで！」

冠葉を巡り、彼の両脇で女性客たちが口論を始める。冠葉は罵り合いを続ける客を交互に見比べながら、どうやってこの場を治めるかを思索しつつ視線を宙に泳がせる。すると店の入り口の方から彼らのテーブルに近づいてくる人影が見えた。

「嫌だわ、早く掃り潰さない」と

颯爽と豪華な縦ロールの髪を揺らしながら店の奥へと歩を進めた若い女性は、冠葉たちのテーブルの前で足を止めると彼の傍らで醜い争いを繰り広げる女性たちを見て不愉快そうに秀麗な眉を顰める。

「ちよつと君、ここは子どもの来る店じゃないんだよ？」

冠葉たちと対峙している女性は高校の制服を着用しており、気高さと気丈さを湛えたその顔立ちが美しかったが歳の頃は若く、まだ成人を迎えていないようだった。店のマネージャーも息を切らして彼女に追い縋り、未成年は立ち入り禁止だと忠告する。

「金ならあるわ、これで足りなければ小切手でも切ろうかしら」

縦ロールの髪をした少女は瞬時に懐から1万円札が何十枚も重なった札束を脱ぎ出し、肩越しにそれをマネージャーの眼前に突きつける。あまり敷居の高くない『愛の狩猟区』を鼻屑にしている客の

中でこれほどの金額を一晚に投じてくれる者はおらず、マネージャーは羽振りの良い少女をこのまま返してしまってもよいかどうかと逡巡し始めた。

「この店でお遊びになられる額はそれで充分でしょう。しかしお客様のお歳は当店をご利用できる年齢に達していないと思うのですが？」

目の前にちらつかされた大金に目が眩んでいるマネージャーに代わって、冠葉が年齢を理由に縦ロールの髪の少女に店から出て行くように促す。

「年齢なら貴方も気にするべきではなくて、在学中の都立高校の生徒が水商売をしていいはずがないでしょう？」

「都立高校の生徒？ 高倉、お前今年で二十歳になるんじゃないのか！？」

年齢を理由にこの店から退出するように言うのならば、現在高校生の冠葉自身もこの店で働く資格はないと少女は切り返す。その一言に冠葉が一瞬険しい表情を浮かべると、マネージャーは採用時に申告された年齢が正しいものかどうかの真偽を彼に問う。

「私わたくしと時を同じくして生まれたこの人が、二十歳のはずないでしょうっ？」

「嘘だ、こんなのそいつの言いがかりだ！」

冠葉と自分が同い年だと言う少女と、彼女が自分を陥れようとして嘘を吐いていると冠葉の主張は食い違ふ。物腰は落ち着いて世慣

れた雰囲気もあるが、顔立ちに幼さが残っている冠葉の顔をマネージャーは訝しげな目でまじまじと見つめる。

「え、わたしこの間冠葉くんが外苑西高の制服を着て歩いているのを見かけたよ？」

「う、うらー！」

「アサミちゃん、その話本当？」

冠葉と縦ロールの少女が彼の年齢に関して口論を始めた途端、その覇気に気圧された2人の女性客は口を噤んでいた。しかしアサミというモデルが先日学校帰りの冠葉を街で目撃したと漏らすと、マネージャーは彼女に向き直って真相を問う。

「うん、同じ学校の制服を着た男の子と一緒に歩いていたよ」

「高倉、ちょっと話を聞かせてもらっていいか？」

自分の質問にアサミが頷き返すと、マネージャーは苦々しい顔で冠葉に店の裏で話したい旨を告げる。

「割がよかったバイトをクビになりそうだ、お前のせいだぞ真砂子<sup>まなご</sup>」  
マネージャーは冠葉を顎でしゃくって自分の後に着いてくるように示すと、テーブルの前から離れていく。彼に従って退席する途中、擦れ様に冠葉は少女に恨み言を述べる。

「私は貴方のためを思ってこうしたのよ、感謝されても恨まれる筋合いはないわ」

「俺のためを思うのなら関わらないでくれ」

冠葉に真砂子と呼び捨てにされた少女は首を捻って自分の行いは間違っていないと反論するが、冠葉は彼女を邪険にあしらうとマネージャーの背中に続いて店の裏へと姿を消した。

「何故なの冠葉、何故貴方は私のことをそれほど拒むの？」

真砂子は冠葉の消えていった方を見つめたまま、恨めしそうに彼がどうして自分の存在を拒むのかと呟いた。

\* \* \*

数日後、都立外苑西高の生徒指導室前の廊下。教員たちからアルバイトの件で呼び出された冠葉を心配して、彼の弟の晶馬しやうまが浮かない顔で指導室の扉の前を右往左往していた。

外苑西高の生徒がアルバイトをする際は学校に届出をして教職員の許可を受ける必要があったが、冠葉は無断でアルバイトをしていた。しかも彼が働いていたのはコンビニやファミレスといった高校生が通常採用されるバイト先ではなく、歓楽街のホストクラブであった。

学校に無断でおまけに未成年の生徒が水商売をしていた事実を学校側は重く受け止めているらしい。冠葉は担任教師だけでなく学年主任や生徒指導部の教員を交えた数人の職員と面談しているようである。既にかれこれ1時間近く話し込んでいた。

「兄貴の馬鹿、だからあんなバイトはやめろって言ったんだ」



不安げな顔で俯いた晶馬は、最悪の場合兄が退学させられてしまう可能性を考慮しながら冠葉に科せられる処罰ができるだけ軽いことを祈る。すると指導室の扉が開き、ようやく教員たちの説教から解放された冠葉が出てきた。

「兄貴、学校をクビにされたりしてないよね？」

「高倉が黙って夜の仕事をしていたことは重大な校則違反だけど、家計を支えるという事情があると知ったんだから学校もそこまで冷酷な処分はしないよ」

晶馬が下された処分の内容について冠葉に訊ねると、彼が弟の質問に答えるよりも先にその後ろから退室してきた白衣を羽織った人物が口を挟んでくる。

「多路先生、それじゃ兄貴はまだ学校にいられるんですね!？」

「ああ。罰として1ヶ月間早起きして校庭の掃除をしなければならぬけれど、お兄さんと一緒に君は勉強を続けることができるよ」

「よかったあ……」

高倉兄弟の担任を勤める若手の生物教師、多路が眼鏡の奥の目を柔和に細めて冠葉が退学にならなかったことを伝えると、晶馬はほっと胸を撫で下ろす。

「何がよかつたっていうんだ。稼ぎのいいバイトをクビになるし、これからバイトをする時にはこと細かく労働条件を学校に報告しなければならなくなつたしで踏んだり蹴つたりだ」

「でも学校を辞めさせられるよりはマシだろう？ 将来のために高卒の資格は欠かせないから絶対に学校は卒業するって前に兄貴は言ってたじゃないか」

生徒指導の教員のブラックリストに名を連ねてしまったことに冠葉は不貞腐れるが、晶馬は最悪の事態が回避できたことを素直に喜ぶべきだと呼びかける。

「うるさい、こうなったら朝の掃除にお前も付き合え！」

「ええっ、何で僕が!?!」

「俺たちは家族だろうっ、だったら罪も罰も分かち合うべきだ」

「何だよそれ、家族の繋がりを自分の都合のいいように使っているだけじゃないか！」

校則を違反した仕事をしていたのは冠葉だけなのに、自分もその罰則に巻き込まれることに晶馬は不平を述べる。自分たちは家族なのだから運命共同体だと冠葉が屁理屈をつけると、晶馬は調子のいいことばかり言う兄に憤って腕を振り上げた。

「おっと、鈍臭いお前になんかやられるものか」

「なにおうー!」

「おーい高倉兄弟、廊下は静かに歩けよ」

自分に手をあげようとする晶馬のことをからかいながら冠葉が昇

降口に向かつて駆け出すと、晶馬は肩をいからせて兄を追走する。元気のいい高倉兄弟の背中を見送りながら、多路は普遍的な学校でのマナーを走り去って行く彼らに浴びせた。

\* \* \*

自宅の近所にある個人経営の書店。高倉兄弟の妹の陽毬ひまりは夕飯の買出しのついでにその書店に立ち寄って、目当ての雑誌が入荷していないかと書棚に目を馳せる。

「ここもやっぱり売り切れかあ、今月号は時籠ときかじゆりのピンナップが載っているから楽しみにしてたのに……」

陽毬は好きな舞台女優の記事が掲載されている雑誌がこの店でも売り切れてしまったことに嘆息して、そのまま店を後にした。

「そうだ、冠ちゃんたちに学校の近くの本屋さんに置いてないか見てきてもらおう」

この界隈よりも賑やかな地区にある学校に通学している兄たちに、下校途中にある大型書店に寄ってもらって探している雑誌が売れ残っていないかを確認してもらおうと陽毬は思いつく。

先日兄たちに購入してもらったばかりの携帯電話を取り出すと、陽毬はアドレス帳から長兄の電話番号を検索してダイヤルをした。

「もしもし冠ちゃん、まだ学校の近くにいますか？」

三度目の呼び出し音と共に電話に出た長兄の冠葉が現在どこにいるのかを陽毬は確認する。仮に学校から離れた場所にいるのなら、

戻ってもらうのは悪いので頼みを断ろうと考えていた。しかし幸い冠葉はまだ学校から最寄駅に向かっている途中であり、陽毬は書店に寄ってもらうようお願いしてみることにする。

「そう、よかった。あのね、ちょっとお願いしたいことがあるんだけど……」

どちらの兄もとても彼女に優しいので、よほど都合が悪くなければお断りを断られることはない。陽毬は算段を踏んでいた。予想通り冠葉は陽毬の頼みを二つ返事で聞き入れてくれる。

店に残っていたら買ってきてほしい雑誌の詳細を冠葉に告げると、陽毬は電話を切って夕飯の支度を整えるためにスーパーへと足を向けた。

\* \* \*

学校からの帰り道にある大型商業施設のテナントに入っている書店を、溺愛している妹の頼みを聞き入れた冠葉は晶馬と連れ添って訪れている。

「雑誌を探すのまで一緒にやる必要はないだろう、俺が見つけた買ってこるから適当に時間を潰してろ」

「そつやって全部いいトコどりするつもりだろう、兄貴？」

冠葉が陽毬に頼まれた用事を独力で片付けるといって、晶馬は自分を貶めて他方冠葉の株を上げるようとしているのではないかと邪推する。

「僻むなよ、陽球はお前じゃなくて俺に雑誌を探してほしいと頼ってきたんだ」

「わかった、それじゃその辺にいるから用が終わったら声をかけてよ」

「おい晶馬、あれ」

本当に陽球が自分ではなく冠葉を頼りにしているように思われて臍を曲げた晶馬は、ぶっきらぼうな態度で店内を適当にうろついていると告げてその場を離れようとする。すると冠葉が晶馬を呼びとめつつ、前方にある何かを指し示した。

冠葉の伸ばした指の先に一人の女子高生が何かを気にしているように何度も周囲を見渡しながら壁の方へと歩いていった。ショートボブの髪に緑色の襟が特徴的なセーラー服を着たその女子高生に晶馬も見覚えがあった。

「あの時の子だ、でも様子が何か変じゃないか？」

「あいつ非常扉から外に出たぞ。晶馬、あいつやっぱり何かおかしいぞ」

苹果りんごという名前の女子高生のことを晶馬は先日満員電車に揺られていた際、たまたま手が尻に当たってしまったせいで痴漢の濡れ衣を着せ掛けられた一件で否応なしに覚えていた。

苹果が挙動不審な様子で非常扉のドアノブに手をかけると、人目を忍ぶようにそこから外へと出て行くのを兄弟は目撃する。冠葉が反射的に尋常でない雰囲気の彼女を追って非常扉へと走り出してい

くと、つられて晶馬も駆け出した。

「あの女、どこに行つた？」

「兄貴、あそこ！」

非常扉の外に設置されている避難用の非常階段の踊り場から冠葉が苹果の姿を捜し求めると、晶馬がフェンスの向こう側に続いている商業施設の外壁を指差す。

苹果は外壁から20cmほど張り出した部分を足場にして、徐々に非常階段から離れていた。一歩足を踏み外せば彼女は数十m下の地上までなす術もなく転落してしまい、無事では済まない。しかし苹果は蛮勇というよりも無謀さを遺憾なく発揮して、何かを求めて奥へと進んでいっていた。

「あの女、自殺願望でもあるのか？」

「よせ、早まるんじゃない！」

苹果はかなりの距離を進んでいたが、行き止まりになっている角に辿り着いても何かがあるようには思えない。冠葉は苹果の正気を疑いつつ彼女が死への憧憬を抱いている可能性を示唆すると、晶馬はそれを真に受けて彼女に自害を思い留まるよう叫んだ。

晶馬の叫び声は苹果の耳にも届き、彼女は一度彼らの方を振り返る。しかしすぐさま視線を前方に戻すと苹果は危険な旅を再開した。

「馬鹿、下手に騒いだらあいつの気を動転させるだけだ！」

「でもこのまま見過ごす訳にはいかないだろう!? 馬鹿な真似は止めさせなきゃ!」

迂闊に苹果を刺激することで不測の事態を招きかねないと冠葉は慎重な対応をするように晶馬を宥める。しかし晶馬はこの高さから飛び降りようとしている苹果の身を案じて、早急に彼女を安全な場所に連れ戻すことを主張した。

「落ち着け晶馬、あいつ立ち止まって何かをしているぞ」

「ケータイを頭の上に掲げて、写メを撮っている……?」

このままでは晶馬が苹果を追って非常階段の向こうへと身を躍らせかねないと、冠葉は弟の肩を掴んでその場に押し留める。高倉兄弟がいがみ合いをしているうちに、苹果は足場が行き止まりに突き当たる部分までやってくると、携帯電話を取り出して内蔵されたカメラで写真を撮るような仕草をするのに晶馬たちは気付く。

苹果は頭上に掲げて撮影したものの写った携帯電話の液晶画面を見て満足げに微笑むと、元来た道を戻り始めた。数分後、苹果は高倉兄弟の待ち構えている非常階段の踊り場まで帰ってくる。

「あんたたち、この間地下鉄で会った兄弟よね?」

「ああ、俺が高倉冠葉でこっちが弟の晶馬だ。まさかこんなところで偶然出くわすとは思ってもいなかったぜ」

「ここは立ち入り禁止の場所まで追いかけてきて何の用、場合によっては兄弟揃って警察に突き出すわよ?」

互いに不幸な事故であったとはいえ、苹果に対して後ろめたさのある晶馬に代わり、冠葉がつっけんどんな口調をしてきた苹果の対応をする。前回の痴漢騒ぎに続き、今回は無断で立ち入りが禁止されている非常階段まで高倉兄弟がやってきたことで苹果は彼らへの警戒心を強めた。

「本屋にいたらあなたが不審な仕草で非常扉の外に出て行ったのを見かけて、何事かと思って後をつけてみたら非常階段の向こうに身を乗り出していた。あんな危ないことを女の子がしているのに気付いたのに、みすみす見過ごす訳にはいかないだろう？」

「ねえ、あんな危険を冒してまで君は何の写真が撮りたかったの？」

冠葉は偶然危地に向かうとしていた苹果を見かけてしまい放っておけなくなったという義理でこの場に残ったと答えるが、晶馬は本当に心配そうな顔で何故彼女があんな無謀な真似をしたのかと訊ねた。

「ツバメの巣よ」

「ツバメの巣、どうしてそんなもののためにわざわざあんな危ないことを?!」

「そんなものですって!? 名前は忘れちゃったけどあれは珍しいツバメの作った巣なのよ。その貴重なツバメの巣の写真を見せれば多路さんは喜んでくれるんだから、あたしにとってはとっても大切なものなのよ!」

苹果が危険を犯してまで撮影しようとしたものがツバメの巣だと聞かされると、晶馬は肩透かしを食らったような気分になる。しか



し自分にとってそれを撮影をする意味は非常に重要なことだと、苹果は眉を吊り上げて晶馬に抗議した。

「多路？ まさかその知り合いは外苑西高で生物を教えてないよな？」

「あなたたちの着ている制服の外苑西高に多路さんは勤めている…同じ学校の人間なら顔見知りでも不思議じゃないわね」

苹果が口に出した苗字は自分たちの担任教師と同じものであったが、冠葉は世の中がそこまで狭いはずがないと冗談半分に質問をする。しかし苹果は彼らの制服を改めて見直すと、知人が彼らの担任をしている青年と同一人物だと結論を出した。

「え、じゃあ君は多路を喜ばせるためにあんなことを！？」

「好きな人に喜んでもらおうと思って頑張ることの何が悪いのよ！ そんなんだからモテないんだろうし、痴漢なんて情けない真似に走るのよ！」

晶馬は自分の担任に喜んでもらいたい一心で苹果が身の危険を考えない暴拳に出たことに仰天するが、その不用意な一言は繊細な乙女の恋心を深く傷つけた。苹果は口角を泡立てるような苛烈な勢いで晶馬に怒号をまくしたてる。

「失礼なことを言うな、僕は痴漢なんかしてない！」

「どうだか、やっぱりあなたみたいな奴に情けをかけるんじゃないかなっつたわ！」

「何事かと心配した拳句、こんなオチかよ…晶馬、俺は陽毬の使いに戻るぞ」

冠葉は苹果のことで気を止んだ結果、少々行き過ぎた振る舞いとはいえ単に彼女が年上の男性との恋を成就させようと努力しただけと知って溜息を吐く。彼女に関わる気力を無くした冠葉は晶馬に事後処理を任せて、妹に頼まれた用事を済ませに向かうことにした。

「え、ちよつと冠葉!？」

「待ちなさいよこの痴漢! 地下鉄でのことだけじゃなく、さっきの不躰な発言を謝りなさい!」

「だから僕は痴漢じゃない!」

やっぱり苹果に関わることは自分にとって鬼門だと晶馬は泣き言を漏らしつつ、面倒なことを押し付けて非常扉の奥に消えた兄の薄情さを呪った。

2nd lap 想いはうまく伝わらない了

2nd lap 想いはうまく伝わらない (後書き)

ピンドラなのにプリクリ様のイリュージョンも運命日記についても触れず、マスコットのペンギンたちも未登場なことにご容赦ください(汗)

そのうちピングドラムに関する出来事を絡める予定ではありませんが、しばらくはパラレルワールドっぽい現代劇チックな展開が続きます。

### 3rd lap 先にあるものは分からない

土曜日の午後、住宅街の一角にひっそりと佇む高倉家。留守を預かった末子の陽毬ひまりは探し回っても見つけれず、兄に頼んで買ってもらった雑誌のページを熱心に見つめていた。

「冠ちゃんは朝から出かけているし、晶ちゃんはお買い物からなかなか戻ってこないし退屈だなあ」

長兄は朝から家を空けており、次兄も買い物に出かけたきり戻ってこず、雑誌を読み込むのにも飽きてしまった陽毬は居間に置かれたソファアの背もたれに身を投げ出して大きく背伸びをする。

「ただいま」

玄関の引き戸が音を立てて開けられると、人のよさそうな、しかし少々頼りない感じもする少年の声が聞こえてくる。次兄の晶馬しゅいまがようやく買い物から帰ってきたと分かると、陽毬は彼を出迎えに部屋を出た。

「お帰りなさい…晶ちゃんその人誰、もしかして晶ちゃんのカノジョ？」

「か、勘違いするな陽毬！ この人はえっと…ちょっとした知り合いで、今日は料理を教えるために家に来てもらったただけだ」

高校生にして豊富な女性遍歴のある長兄とは対照的に浮いた1つない次兄が家に女子高生を連れてきたのを見て、陽毬はショートボブの髪をしたその少女が彼と恋仲なのではないかと勘繰る。

しかし次兄は取り乱した様子で首を激しく横に振ると、後ろに控えた少女が自宅を訪れた理由を陽毬に語った。

「やっと晶ちゃんにも綺麗な彼女が出来たのかと思ったのに残念。はじめまして、わたしは妹の陽毬って言います」

「荻野目苹果あきのめりんこです、よろしくね陽毬ちゃん」

「晶ちゃん、すぐにお茶の支度をするね。荻野目さん、狭い所ですけどごゆっくりどうぞ」

陽毬と苹果がにこやかに挨拶を交わすと、陽毬は珍しくやってきた客人をもてなす準備をするために家の奥へと駆け戻っていった。

「あの、荻野目さん…妹の言ったことは冗談だと聞き流してくれれば助かるんだけど」

「そのことなら妹さんの可愛らしさに免じてあげるし、あたしがあなたに興味を持つことは絶対にならないから安心して」

「…ありがとう」

晶馬は引き攣った顔で苹果の顔色を覗うが、痴漢を働いた疑惑のある彼の恋人と誤解されてもあまり苹果は陽毬の軽はずみな推測を気にしていないようだった。

「そんなことよりもしつかり頼むわよ。お弁当の出来具合であたしと多路たぶきさんの運命が変わるんだからね！」

「分かつてるよ、料理のことならなんとかなるさ」

晶馬の他人に少しは誇れるものとして料理があり、苹果の問いかけに対して若干の自信を覗わせる返答をする。いつもは神経質なまでに周囲の視線を気にかけているようで気弱に思える晶馬から、苹果はほんの少しだけ頼り甲斐があるように感じた。

苹果が高倉家を訪れて晶馬から料理を教わるようになった経緯には、明日の野鳥観察で意中の男性との距離を縮めるために美味しい弁当を差し入れて自分の女子力を相手の男性に売り込もうという企みがあった。

苹果が想いを寄せている男性は彼女よりも10歳近く年長で、高倉兄弟の担任を勤めている生物教師の多路という男だった。多路は皺の寄った白衣を羽織って眼鏡がトレードマークの温和そうな人物ではあったが、正直女性に言い寄られるような風采の上がる青年ではない。しかし苹果は幼少期より懇意にしている彼に一途に恋焦がれて、彼との恋を成就させようと躍起になっていた。

その目標を達成するために苹果は料理が得意で家庭的だという印象を多路に与えたかったが、生憎と彼女はカレーや肉じゃがなどの一品料理は作れてもあまりレパートリーが多くない。一方で晶馬はほぼ毎日兄妹3人分の食事の支度をしており、食事に彩りを添えるため様々な料理を作っている。

先日、繁華街の商業施設で偶然の再会を果たした時のやりとりで、晶馬の自炊能力が自分よりも高いと感じた苹果は、多路に差し入れする弁当作りに協力を要請した。

当初苹果の申し入れを晶馬は拒んだが、初めて彼女と関わり合い

になった一件で痴漢を働いた疑惑を抱かれ脛に傷を持つ身であり、それを口外すると彼女に仄めかされると弁当作りへの渋々助力を了承する。

そして晶馬は今夜の夕食の買出しと併せて、苹果の弁当作りの材料の買出しにも付き合うことになり帰りが遅くなったのだった。

「それじゃまず卵焼きから作ろうか」

苹果の恋を実らせるための支援をする義理がないものの、弱みを握られている以上、下手に彼女に逆らえない状況に偏頭痛を覚えながら、晶馬は愛用のエプロンを纏って作業を始める旨を告げる。

「晶ちゃんの卵焼きはね、隠し味にラー油を使っててすごく美味しいんだよ」

「ラー油なんか入れて脂っこくならないの？」

「ぎとぎとにならないよう、入れるのはほんのちよつとだけさ」

陽毬が苹果に兄の作る卵焼きの味は格別だと太鼓判を押すと、苹果は意外なものを隠し味として使っていることに怪訝そうな顔をする。

晶馬は金属製のボウルの中で卵を解きほぐしながら、匙加減に注意が必要だと苹果たちに返事をした。

\* \* \*

「いい天気、今日はなんだかいいことがありそうね」

日曜日、空は朝から雲ひとつない快晴で外を出歩くには絶好の気候だった。苹果はうきうきと気持ち弾ませながら、眩しく日差しを照りつける空を見上げる。

「僕は朝から厄介ごとに巻き込まれているけどね……」

両手でなければ持ち運びのできないお重を抱える晶馬の両手が、満載に詰められたおかずの重さに耐え切れず痙攣している。

昨日の時点でおかずを作り過ぎていたことは明白だったが、苹果は作った品を全部お重に詰めて好きなものを多路に選んでもらえばいいと気楽に考えていた。そしてか弱い女子の細腕では持ち運べないお重の運搬の役目を、体よく使える晶馬に苹果は命じて彼は彼女に同行して野鳥観察の行われる公園にやってきたのだった。

「ご苦労様、お弁当はここまで運んでもらえば充分だからもう帰っていいわよ」

「ならお言葉に甘えて僕はここで……」

「こんにちは苹果ちゃん。あれ、一緒にいるのは高倉じゃないか？君たちが友だちだったなんて知らなかったよ」

苹果にお払い箱にされても晶馬はこれ以上重たい弁当の運搬も、傍若無人な彼女に付き添う必要もないことを思い嬉々とした様子で公園を後にしようとする。だが聞き覚えのある暢気な青年の声が聞こえてくると、晶馬は反射的にその場に立ち止まってしまった。

「多路さんこんにちは、でも彼とはただの知り合いです。恋人とか



仲のいい異性の友だちとかそういうんじゃないんでご心配なく！」

「高倉も野鳥に興味があるのかい？ 苹果ちゃん以外にも若い会員が増えることは我が野鳥の会として大歓迎だよ」

自分と晶馬は特別な関係ではないという苹果の弁明を聞き流し、遠目にも目立つ蛍光色をした野鳥の会のユニフォームらしいTシャツを着た多路は彼女だけでなく晶馬も野鳥観察に興味があるのかと嬉しそうな顔で問いかけてくる。

「いえ、僕は別に……」

「ハイ、高倉くんも野鳥観察はとて面白い趣味だと言っていましたよ」

多路の誤解を晶馬が解こうとするのを、苹果は思い切り彼の足の甲を踏みつけて無理矢理黙らせる。

「…いきなり何を？」

「気が利かないわね。多路さんが趣味を共にする仲間に出会えたと思っっているんだから、がっかりさせないためにも適当に話を合わせなさいよ」

「なんで僕がそんなことを…痛っ!？」

晶馬が涙目で声を潜めながら苹果の突然の凶行に不平を言うと、彼女は多路の気を損ねないような受け答えをするように晶馬に強要する。どうして自分がそこまで多路に義理立てをしなければならいいのかと愚痴を零すと、苹果は再び晶馬の足を踏みつけた。

「それは言ばしいね。じゃあ高倉も僕らと一緒にこの公園の野鳥を観察しないか？」

「えっ!？」

苹果がご機嫌取りに吐いた嘘を鵜呑みにした多路が晶馬もここで一緒に野鳥観察を楽しまないかと誘うと、予想外の事態に晶馬と苹果は声を揃えて驚嘆の声をあげる。

「え、あの多路さん……?」

「うん、やっぱり楽しい時間はみんなで共有すべきだよ。さあ苹果ちゃんに高倉、一緒に仲間たちのところに行こうか」

「ちょ、ちょっと多路さん!」

多路は趣味を同じくする晶馬にも楽しい時間を送ってもらおうという善意で、高校生2人の手を引いて野鳥の会の同志の下へと向かう。

多路と2人きりでロマンティックなバードウォッチングをするつもりだった苹果は、邪魔者の晶馬を厄介払いするタイミングを掴もうとするが、若い同志を獲得できた喜びで気持ちの昂っている多路の耳に彼女の訴えは届かなかった。

\* \* \*

「はあ、せつかくの日曜になんでこんなことを……」

「それはあたしの台詞よ。どうして多路さんと2人きりになれるは

ずだったのに、お邪魔虫のあんたが付きまどってくるのよ？」

晶馬が休日の一時に林の中を散策する破目になった己の不遇をぼやくと、苹果は恨めしそうな目で肩を落として隣を歩いている彼を一瞥する。

野鳥の会のメンバーたちに多路から野鳥観察を趣味にしている自分の教え子だと紹介された晶馬は、減少傾向の続いていた会に若い風が吹き込んできたと手厚い歓迎を受けた。

野鳥の会の面々が自分の到来を非常に喜んでいるのを見ると、晶馬は野鳥観察に全く興味が無いという事実を告げにくくなってしまった。そのまま会の雰囲気の流れされて、手渡された多路や苹果が着用している野鳥の会のユニフォームであるTシャツに袖を通すと、晶馬は多路に引き連れられて野鳥観察に参加させられてしまった。

「僕だつてここにいたい訳じゃないさ、でも君たち離れようとする  
と決まつて……」

「おい高倉、苹果ちゃん、こつちで珍しいものが見られるぞお」

「…多路が見計らつたように声をかけてきて、離れられないんじゃないか」

自分が苹果たちから離れようとする時は決まつて、多路に絶妙のタイミングで呼び寄せてしまい結局彼らと行動を共にすることになつてしまつと晶馬は溜息を吐いた。

その後も晶馬が家に帰る機会をことごとく取り逃がしてしまつて  
いるうちに、時刻は正午を回っていた。

「もうこんな時間か、苹果ちゃんたちもお腹空いてないかい？」

晶馬だけでなく多路も空腹を覚えたようで、遊歩道の真ん中で立ち止まって彼らに昼食を摂らないかと訊ねてくる。

「多路さん、あたしお弁当を作ってきたんです！」

「本当、お呼ばれしてもいいのかな？」

「もちろんです、多路さんに食べてもらうために作ってきたものですから！」

苹果は多路のために弁当を用意したと胸を張って答え、自慢の手料理を彼に味わってもらおうとする。

「それじゃ、ありがたくいただきかせてもらおうかな」

「あれ、お弁当の入った包みは？」

「ああ、さすがに手が疲れたからさっきあそこのベンチの上に一旦置いてきたけど」

「ベンチ…きやーっ!？」

持たせてあるはずのお重の包みが晶馬の腕の中にないことに苹果が気付くと、彼は少し離れた場所にあるベンチの上に置いてきたと返事をする。晶馬が指差した先に苹果が視線を向けると、そこで起こっていた惨状を目の当たりにして彼女は絶叫した。

昨日丹念込めて多路のために拵えた弁当は、彼女が目を離していた僅かな間に付近に生息しているカラスによってお重を開封されて手当たり次第に食い荒らされていた。苹実は弁当を啄むカラスを追い払おうとそちらに飛んでいくが、時既に遅くお重の中はカラスに貪られて空になっていた。

「せっかく頑張って作ったのに、そんな……」

苹果は真心を込めて作った弁当が無残にもカラスどもの腹に納められてしまったことに落胆して、俯いたままその場にへたり込んでしまう。見る影もなく落ち込んだ苹果の寂しげな背中を見て、晶馬は自分の不注意で彼女に悪いことをしてしまったという罪悪感を覚えずにはいられなかった。

「苹果ちゃんが作ってくれたお弁当が食べられないのは残念だけど、代わりに僕がお昼をご馳走するよ」

「多路さん……」

多路の顔を見上げようとこちらに振り向いた苹果の目には涙が滲んでおり、晶馬は胸に棘が刺さったような苦い気持ちになる。

「まあ、園内の売店のものだから大したものには食べさせてあげられないけどね。焼きそばやホットドックでもお腹に入れば少しは気持ちも晴れるだろうし、行こう苹果ちゃん？」

「…はい」

苹果は弱々しい笑みを浮かべて頷き返すと多路の後について売店に歩き出した。晶馬はカラスに蹂躪された弁当の片づけをすると、

空になったお重を抱えて苹果たちの背中を追いかけた。

多路と苹果の背後に迫ってくると、晶馬は彼女が会話の中で多路に励まされていることで次第に元氣を取り戻していることに気付く。苹果が嬉しそうに多路に微笑み返す横顔を見て、晶馬は今彼女たちに合流することは非常に野暮な行いに思えてきた。

晶馬は歩調を緩めると、苹果たちと10mほどばかりの距離を置くことにする。そうして微妙な間合いを保ったまま晶馬が売店に歩みを進めていると、向かいから鍔の広い帽子を被った女性がやってくるのが見える。

「ももか桃果!？」

晶馬の前方を歩く苹果の目の前までやってくると、鍔の広い帽子を被り典雅な衣装に身を包んだ女性は幽霊でも見たようにその美貌に驚嘆の色を浮かべる。

「馬鹿ね、16年前にいなくなってしまった桃果がここにいるはずがないじゃない…お騒がせしてごめんなさいね、貴女が古い友人によく似ているものだからつい驚いてしまったの」

「古い友人、じゃああなたは姉のことをご存知なんですか？」

眼前に佇む麗人が優雅な仕草で侘びてくると、苹果は見覚えのない彼女が自分の姉の知り合いと察する。

「ええ、桃果は私の大切な友人だったわ。そう言えば昔、もうすぐ妹が生まれると桃果は言っていたわね。これも何かの巡り合わせでしょうし、よかったらお名前を教えていただけないかしら？」

「はい、あたしは荻野目苹果って言います」

「時籠<sup>ときかじ</sup>ゆりよ、よろしくね苹果ちゃん。あれ、そっちにいるのはもしかして多路くん？」

名を問われた苹果が桃果の妹である自分の名前を伝えると、女性は秀麗な顔に優しい笑みを浮かべる。時籠ゆりと名乗った美女は苹果の後ろに控えた多路の顔を一瞥すると、彼が自分と面識のある人物ではないかと問いかけた。

「お久しぶり。小学校を卒業して依頼だね、時籠さん」

「ゆりでいいわ、多路くん」

「高名な女優をしがない高校教諭が呼び捨てにしているのかな？」

「構わないわ、子どもの時はそう呼んでいたじゃない」

野鳥観察に並々ならぬ関心を持っていることを除けばどこにでもいる平凡な青年の多路と、舞台女優として世間から賞賛を集めているゆりが小学校の同級生として親しげに言葉を交わしているのを見て、苹果は雷に打たれたような衝撃を覚える。

「お揃いでステキなTシャツを着ているけど、何かのイベントの活動中かしら？」

「一緒に野鳥の観察をしているんだ。苹果ちゃんもこっちにいる僕の教え子の高倉も、野鳥を愛している仲間だよ」

ゆりの質問に対して多路は晶馬と苹果も自分と思いを共にする同志だと紹介するが、誤解されたままの晶馬も多路の気を引くために嘘を吐いている苹果も洪面を浮かべた。

「志を共有している若い仲間がいて羨ましいわね」

「ああ、高倉たちみたいなき者がいてくれることで年々生息環境の厳しさが増している野鳥たちも救われることだろう」

ゆりの言葉に頷き返しながら、多路は野鳥を愛し保護に取り組む後継者が見つかった喜びをしみじみとした顔で呟く。

「ところで苹果ちゃんと共通の趣味を持っている高倉くんは、彼女の恋人なのかしら？」

「違います、高倉くんはただの知り合いです！」

ゆりが多路よりも更に後方に控えている晶馬を見つめた後、苹果に視線を戻して彼女たちが恋仲であるのかと勘繰ると、苹果は声を荒らげてゆりの推測を打ち消した。

「そう。彼は素直で可愛らしい男の子だし、苹果ちゃんとお似合いだと思うけど」

「そんなことはありません、それにあたしは他に好きな人がいるんです！」

苹果はいい雰囲気になっていた所に突然現れて、多路に馴れ馴れしく接するゆりの態度に苛立ちを募らせながら憤然と自分が晶馬を好きになることはないと主張した。



「それは残念ね……ところで多路くん、もしかしてあちらの売店に行こうとしているの？」

「ああ、お昼を買いに行くところなんだ」

「よかつたら私のお弁当と一緒に食べない、少しはお腹の足しになると思うわよ？」

多路たちが売店に昼食を求めに行くという話を聞くと、ゆりは手に提げた籐で編んだバスケットを掲げて彼らに指し示す。

「もらえるのなら喜んで」

「じゃあ再会を祝してお昼をいただきましょう。苹果ちゃんと高倉くんもいらっしやい」

「あの、僕は……」

「いいから黙ってついてくる！」

多路が進んでゆりの料理に呼ばれると聞くと、苹果は不機嫌そうにしかめ面になる。ゆりに同席しようとする誘われるのを渋る晶馬だったが、苹果はこれ以上ゆりが多路に付け入らせないよう彼らの会話の邪魔をするための増援として晶馬を連れて行くことにした。

苹果に腕を引っ張られて晶馬は有無を言わずに多路が芝生の上に広げたピクニックシートまで牽引されていった。

\* \* \*

昼下がり、園内に設けられた池の畔を多路とゆりが並んで歩いているのを、苹果は心中穏やかでない様子で彼らの後ろから眺めている。

「ゆりさんのお弁当、盛り付けが綺麗で美味しかったなあ」

「…デパ地下で買ってきたものを詰めたに決まってるわ。大体1人で公園に来ていた人がどうしてあんな手の込んだ弁当を持つてるのよ?」

「ご馳走になったゆりの弁当が見た目も綺麗で味もよかったことに口元を緩めて晶馬が反芻すると、苹果は不愉快そうによりいっそう眉間に深く皺を刻む。

「なんだかいい感じだね、多路とゆりさん」

共に過ごした小学校時代の思い出に浸りながら、多路とゆりが話に花を咲かせているのを晶馬は羨むような目で見つめる。蛍光色の布地で作られた野鳥の会のTシャツを着ている多路と、仕立てがよく一見ただけで高価なものと分かる服を纏ったゆりが人目を惹きつける理由は異なっていたが、不思議と晶馬は彼らが並んでいても違和感は覚えず恋人と呼ばれても頷けるように感じていた。

「冗談じゃないわ! どうして急に湧いて出たあの女に多路さんを寝取られなきゃいけないのよ」

「悔しい気持ちは分かるけど、多路とゆりさんは僕らが生まれる前からの知り合いなんだろう? だったらいきなりゆりさんが多路の前に出てきた訳じゃ……」

「あたしと多路さんは必ず結ばれる運命にあるの、これはその途中にある些細な障害でしかないわ!」

晶馬が正論を言っているとは思いつつも、苹果は悔し紛れに彼の尻を蹴飛ばして余計なことを言う口を嚙ませる。そしてゆりの出現は自分と多路の愛を妨げる試練の1つに過ぎないと自分に言い聞かせて、必ずこの逆境を乗り越えてみせると闘志を滾らせた。

「泥棒猫め、見てなさい。あなたがいくらちよっかいを出しても、あたしたちの運命には何の影響も与えられないということをお願い知らせてやるわ」

「…今度は何を企んでいるの?」

苹果がゆりへの恨み言を口走るのを耳にすると、晶馬は嫌な予感を覚えて彼女が何をしでかそうとしているのかと注意を傾ける。すると苹果は池の外周を取り囲む柵の上によじ登って、その向こうに身を投げ出そうとしていた。

「おい、まさか……」

「あたしと多路さんの運命は繋がっている。デステイニイッ!」

晶馬が懸念した通り、苹果は覚悟を決めて雄叫びをあげながら多路の注意を引こうと池に飛び込んでいく。

「きゃー助けて、このままだと溺れちゃうー!」

苹果は如何にも芝居がかった悲鳴をあげながら、わざとらしく水

飛沫を上げて溺れそうになっているよう振舞う。

しかし苹果たちを尻目にゆりと話し込んでいた多路はかなり遠くを歩いていて、苹果が池に落ちたことにも気付いていないようだった。加えて最初は演技だったにも関わらず、池に浸かっているうちに次第に衣服が水を吸って体が重くなり自由が利かなくなっていることに苹果は気付く。

「助けて多路さん、これじゃ本当に溺れちゃう！」

苹果は必死に多路に助けを求めて水面近くでもがき続けるが、徐々に体が池の底へと沈降し始めている。だが多路は未だに苹果が溺れていることに気付いていないらしいようで、こちらを振り返りもしない。

「た、ぶき、さん……」

苹果はか細い声で彼の名を呼び、ゆりと並んで歩いている多路の背中に縋るように手を伸ばすと力尽きて水中へと沈んでいく。

決死の思いで助けを求めたのに多路は自分の声に全く気付かず、唐突に出現した女にすっかり籠絡されてしまったことを思うと苹果は非常に悲しい気持ちになった。

下手にもがいたせいで急速に体力が奪われた上、ゆりが横槍を出してきたせいで気力まで殺がれてしまうと苹果は本当にどうなっても自暴自棄な気分になってしまう。意識が薄れていく中、苹果は誰かが水面から自分に向かって泳いでくるような錯覚を感じた。

\* \* \*

「…ん、苹果ちゃん！」

意識を取り戻した時、苹果は誰かの膝の上に背中を預けているのを感じる。ゆっくりと瞼を開けていくと、多路が心配そうな顔で自分のことを見つめているのに気づいた。

「た、多路さん!？」

「目を醒ましてくれてよかった…一時は本当に駄目かと思っていたんだ」

溺れてから意識を失っていた苹果が目を醒ますと、多路は心から安心したように強張らせていた口元に笑みを浮かべる。苹果は危険な状態に陥った後、多路の笑顔を見たことで緊張の糸が切れてわつと泣き出しながら彼の胸に飛び込んでいった。

「人命救助をするなんて、見かけによらず貴方は下手なお話の人物よりもずつと行動力がある王子様ね？」

「からかうのはよしてください、目の前に溺れている人がいるのに見捨てる訳にはいかないでしょう?」

多路の胸で苹果が泣きじゃくっている所から視線を戻し、ゆりは晶馬をいたずらっぽく目で見つめる。晶馬は苹果を助けるために自分も池に飛び込んで、びしょぬれになった衣服のうち上着を脱いで水気を絞りながらやむをえない状況だったと答えた。

「人工呼吸のためとは言え、苹果ちゃんに口づけした感想はいかがかしら、王子様?」

「…その質問にはお答えしかねます」

池の中から引き上げた時、苹果は大量の水を飲んでしまったせいで息をしていなかった。晶馬はこのまま放っておいては危険だと、保健体育の授業で習った人工呼吸をうる覚えの状態で実施し、彼女の命を救った。

ゆりが結果として苹果と唇を重ねた気分を愉快げに訊ねてくると、晶馬はそっぽを向いて黙秘することにした。

3rd lap 先にあるものは分からない了

3rd lap 先にあるものは分からない (後書き)

原作よりも前倒しの展開で若干早目にファビュラスなあの人もちよつと違った形で登場しました(笑)

今後も極端な逸脱をしない程度に改変を続けていく予定ですが、願わくばお付き合いをお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9864z/>

---

ひとりじゃ飛べない～輪るピングドラム

2012年1月3日03時02分発行